

『我と汝』

2019年08月31日

マルティン・ブーバーの『我と汝』を久しぶりに読み返してみた。私が持っている本は『孤独と愛 —我と汝の問題— ブーバー原著 野口啓祐訳 創文社刊 昭和36年3月30日 第二刷発行』である。神学校に入学して、直ぐの頃、買って読んだ本である。鉛筆で、傍線が引いてあり、懐かしく思い出した。「帯」には「本書は1923年公刊以来、西欧の思想界に大きな影響を与えて来たマルティン・ブーバーの不朽の名著『我と汝』Ich und Duの全訳である」と書かれている。ブーバーはユダヤ人として生まれ、恵まれた学術環境で育ち、哲学、文学、芸術などの研究を修め、ドイツ神秘主義思想の影響を受けており、また、過激なシオニストでもあった。『我と汝』は小さな本であるが、西欧の思想、神学、文学界に大きな影響を与え、医学界の精神療法の専門家の間でも鋭意研究されてきた。閉塞した世界に、新しい時代を切り拓く思想の礎にあった著作であった。

最初の文章が極めて印象的で、本書の核である。「ひとは世界にたいして二つのことなった態度を取る。それにもとづいて世界は二つとなる。ひとの態度は、そのひとが語る根源語の二つのことなった性質にもとづいて、二つとなる。根源語は孤立した語ではない。複合的な語である。根源語の一つはわれ—なんじであり、他はわれ—それである。ただし、この場合、それのかわりに、かれ、あるいはかの女という言葉を使っても、根源語にかわりはない。上のことからして、ひとがわれというとき、そのわれには二重の意味のあることがわかる。なぜなら、われ—なんじにおけるわれと、われ—それにおけるわれとは、たとえ同じでも、意味するところはまったく違っているからである。」

人は、我と汝 (Ich und Du) と我とそれ (Ich und Es) の二通りの関りを持つ。我と汝の関りは、甲なる主体の我と、乙なる主体の汝が向き合う関係である。この関係は、互いに主体を持っているので、汝は自分勝手に利用できない、全身全霊を持って相対する人格をもって結び合う出会いである。我と汝は、生きた関係をもち、人間として互いに高め、深め合う。一方、我とそれの関りは、甲なる主体は、乙を対象として体験し、客体とする関係である。それに向き合う我は、意識の中心であり、それを見て、配列し、自分勝手に利用する主体となる。この主体を取り巻くその全ては、その機能の対象に過ぎない。我と汝の関係を結ぶ時、我と汝の根本的原理にもとづいた人格的共同体で、真実な「対話」が成立し、人は喜びの中で人になっていく。ところが、我と汝の相互的、現存的な関係が、消滅したり、あるいは、故意に壊し、汝がそれになってしまうことがある。他人をそれと見なし、自分の欲望を実現する手段としてしか見ない。現実の世界で、政治において為政者と民衆、経済において資本家と労働者、文化においても芸術家と一般大衆との間で「対話」は失われ、「独語」がいかに広がっているか。ブーバーが提出している「我と汝」「我とそれ」の問題は、互いに生き合う関係を喪失した今日の世界の悲劇的な状況をあぶり出し、その回復を指し示している。もちろん、それとの関りの重要性も説いている。ブーバーは更に、「われとなんじの関係を無限に延長すれば、われは永遠のなんじと出会う」と書いている。人を汝として向き合っても、時として、汝がそれになる。しかし、それになり得ないものが「永遠の汝」と呼ばれるもので、それが神である。私たちが、神に対し我一汝の関係を求めていく時、第三人称の神としてではなく、汝としての神の真の姿を啓示される。私たちは、神をそれ (Es) として熱心に探究しているが、永遠の汝 (Du) として啓示される神との出会いの渴望が求道の核心であると気付かされる。